

患者の目

私がソーシャルワーカーを目指すようになったのは、混合型血管奇形という病気のために中学1年のとき脚の手術で入院したのがきっかけだ。入院先では様々な障害を抱え、地元中学校に通えない小中学生約30人が集団生活を送りながら養護学校に通っていた。

医療ソーシャルワーカー 片岡 千恵氏 ③



慣れた地域で暮らしていた私は衝撃を受けた。なぜ障害があるだけで地元の学校に通えない子どもがこんなにいるのか憤りを覚えた。しかし入院から3カ月たった頃、病棟生活が居心地良くなっていることに気づいた。脚をジロジロ見られず、偏見がないことに精神的な居心地の良さを感じていた。そんな私に主治医は「この生活に慣れてはいけない。戻れるなら早く帰

った方がいい」と早期の退院を勧めた。元の生活に戻りやすいようにとの配慮だったのだろう。

結局退院は、雪で転倒の危険性が高い冬を避け、春休みまでずれ込んだ。入院中、私は「患者のつらい思いを理解してくれる人が病院内にいたらいいのに。障害や病気があろうとなかろうとみんなが仲良く地域で生活できたらいいの」と母に伝えたぞうだ。

母は書店に行つて関連書籍を調べ、障害や病気を抱える人の社会生活を援助するソーシャルワーカーという仕事があること、社会福

苦しみ分かるからこそ

祉士などの資格があることを私に教えてくれた。その日から将来の夢はソーシャルワーカーになった。

大学もソーシャルワーカーの養成課程がある学校に進学し、勉強や実習に励んだ。ところが、いざ就職活動に入るとなかなか決まらない。長年の夢をかなえない一心だったが履歴書は返されるばかり。これまでの経験は何だったのか。病気のある自分を悔やんだ。

生活のこともあったので就職活動を続け、大学卒業から2カ月後、療養型の病院での採用が決まった。20件目の応募だった。

この仕事に就いて9年目。数えきれないほどの患者さんやご家族と出会った。苦しい胸の内を聞くと、痛いほど気持ちがわかると。わかるからこそ中途半端な言葉をかけられない。それでも「聴いてもらえて良かった」「ありがとう」という言葉をもらえると、病気を持って生まれ、この仕事をして良かったと思える。

ソーシャルワーカーという存在を教えてくれた母に、病気を持ちながら地域で暮らすことの大切さを教えてくれた主治医に、感謝の気持ちでいっぱいだ。

医療 療